

423-305



亞細亞大觀附錄

踏破攝影略圖



版權所有 不許複製
 大連市山縣通一九三
 編輯人 青山春路
 發行人 島崎役治
 發行所 亞細亞寫真大觀社

第百二十五回
 拾壹輯七回

朝陽の沿革一面

三室山人

- 一 黃塵の義縣……………
- 二 義縣の鼓樓……………
- 三 大奉國寺の伽藍……………
- 四 大佛莊嚴……………
- 五 金代の石碑……………
- 六 朝陽南門外……………
- 七 朝陽の牌樓……………
- 八 朝陽の北塔……………
- 九 佑順寺……………
- 十 佑順寺の塔……………

大連市山縣通一九三

亞細亞寫真大觀社

電話二六二三五
 振替穴連七二八
 發行 毎月一回發行

朝陽の沿革一面

三室山人

朝陽附近の歴史は非常に古く、西紀前三世紀の前半に今の河北省方面で活躍してゐた燕國が、滿洲に勢力を伸ばして最初の長城を築いたが、その時から既に朝陽附近を遼西地方統治の中心地とした。秦の始皇帝の勢力が前三世紀後半に及んだ時も亦然り。前漢時代には且慮縣が置かれ、そして此處が遼西郡治であつたらしい。斯く支那から滿洲南部全般に手をのばさうとする時には、先づ熱河南部を把握し、朝陽附近を前進の據點とするのが當套的戰法であつた。

紀元前三世紀の初頃から既に支那の政治的勢力が伸びてゐたのだから、支那文化の傳播は恐らくそれより以前からだつたと推察され、且つ支那民族の一部のものは熱河省南部のみでなく、北部方面までも入り込んでゐたのであるだらう。今日、赤峰地方の金石併用時代の遺物の中から、支那古文化の影響によるものが出たとしても、餘り不思議ではあるまいと思ふ。

二世紀になるまで北方民族烏丸が活躍を始めて、遼西郡は大半放棄したので、支那の勢力が衰退した。その時、朝陽附近も亦烏丸の手中に歸したやうである。三世紀には烏丸が衰へて、同じく北方民族の鮮卑が勢力を張つたので、支那の政權は北へ伸びなかつた。四世紀の半頃、鮮卑出身の慕容氏は今の朝陽に龍城を築き、宮殿及び宗廟を建てた。龍城はまた和龍城とも言つた。統治者は北族であつたがその文化は明かに支那風であつたことが察せられる。四世紀末から鮮卑族の一派たる拓跋氏（北魏）が勢力を得て、五世紀の半以前には熱河省南部をも手中に収めた。故に今の朝陽、即ち和龍城も亦北魏に屬することになつた。北魏はこの和龍城に營州の州治を置いたが、六世紀の半前に北魏が分裂して東西の魏となり、その中の東魏が滅亡することにも、北齊が同じことを繰り返して營州を和龍城に置いた。

七世紀の始め以來、隋が高句麗討伐のために大兵を出して失敗を繰り返したが、その頃朝陽は隋の遼西郡治所を置き柳城と呼ばれた。引きつづき唐も大軍を以て遠征したが、唐代にはここが營州（柳城郡治所、柳城）と呼ばれた。支那が滿洲東方に手を伸ばす時に、再び此處が重要な據點になつたのである。

七世紀の終頃（唐の高祖通天元年、西紀六九六）北方民族の契丹が營州を占領した。これは翌年辛じて回復したが爾後唐の勢力は次第に衰微の傾向を示した。營州都督の如きものも、柳城より後退して今の長城以南に置く場合が多くなつた。唐の政策も亦塞外に勢力を張るのを放棄する方に傾いた。斯る情勢の下に、滿洲の東北から渤海國が建國の聲をあげたのである。渤海の始祖大祚榮は營州即ち今の朝陽に居たが、契丹が營州を占領の亂を起した時、東方に逃れて遂に建國するに至つた。渤海國と朝陽との歴史的關係は頗る重要だと言つてよからう。

朝陽の出身者として大書したいのは安祿山である。舊唐書に安祿山は營州柳城の雜種胡人也とあるやうに、安祿山は純粹の支那人ではなくて北方民族（契丹か奚か明りてないが）の血が混つてゐた。彼は契丹などの討伐によつて勇名をあげ、八世紀の半以前には遂に營州都督となり、再び朝陽附近が支那勢力の中心となつたが、十五六年ならずして安祿山は叛旗をひるがへしたので、この地方は混亂して支那勢力が覆滅することになつた。唐の勢力が退却したので、奚、契丹の二民族が活躍を始めたが、やがて回紇が是を壓迫することになり奚は衰亡した。九世紀半頃より回紇が衰へると共に契丹が勢力を回復し、遂に十世紀の始めに遼國を建てた。

今の朝陽は遼の興中府であつた。興中府と改稱したのは重熙十一年（西紀一〇四二）であつたが、その勢力はそれ以前から早く及んでゐたことは言うまでもない。現在建つてゐる朝陽の塔は、この遼代に建てられたものであらう。十二世紀の始めに女眞族が金國を建てると、この地も亦金の領土になつたが、同じく興中府と言つた。十三世紀に蒙古民族の建てた元が活躍するに至つて、ここは大寧路興中州と呼んだ。元初には金代と同じく興中府であつたが、一時廢止になり、至元七年（西紀一二七〇）復活したが興中州に降されたのである。

明代の初期には支那民族の勢力が非常に伸びたので、朝陽附近は營州左屯衛に屬することになつたが、まもなく明の勢力は長城以南に後退して、秦寧衛を置いたが實勢力はばす、また此の地は蒙古民族遼の手に歸した。故に元末に大打撃をうけて以來、この地には支那文化が十分根を張る機會を失つてゐるから、明代の遺物が殆んどないのは當然である。蒙古人の手中に歸して以來、都市の形態を失つた所に、獨り遼代の塔が三つ立つてゐるところから、この地を蒙古人はコルベン・ソプルカと呼ぶやうになり、これを支那譯して三座塔といふ地名が支那人間では行はれることになつた。三座塔といふ地名が何時から行はれたかは知らないが、清朝初期の文獻にはある。三塔の中の一塔は清初に壞れたといふから、三座塔の蒙古名は明代から行はれたものだらう。

清朝になつても直ちに此の地は重要視されず、乾隆三十九年に三座塔廟を置き、四十三年に朝陽縣を置いた。この名稱が現在に及んでゐるのである。

以上の瞥見でも明かなやうに、此の地方は早くから支那文化を浴して開發される地位にあつたが、支那の政治的勢力が及んだのは燕、秦、前漢と唐代初期の約百年と位のもので、他は全部北方民族の勢力圏にあつた。文化的所産としては唐代以前のものに若干の期待を持ちたいが、既にそれが消滅されたものとすれば、遼、金、元の間の遺物が可なあつてよからうと思ふ。現に二つの佛塔が立ち、關帝廟内には遼碑があり、金代の經幢も二つある。見事な遼代の墓誌も發掘されてゐるので、今後にも十分の期待が出来ると思ふ。



縣義の塵黃

(縣義省州錦)

四月五月の兩月は滿洲西半部が黃塵で蔽はれる。眼をあけて正視することが出来ない。この寫真も斯る惡天候の撮影だ。
 義縣は遼くとも遼代の宜州以來開けた所であるが、奉國寺と嘉福寺塔との外には、古きを示すものがない、見渡す限り清朝以來の新しい街である。ここも亦平房が多くて、瓦葺の屋根は極めて少ない。

(印畫の複製を禁ず)

義縣の鼓樓

(錦州省)

義縣城内にも中央の十字大街に鼓樓が建つ。遼西都市には必ずと言ってよい位、鼓樓がある。俗に鼓樓と呼ぶが単に大鼓を置く所ではなく、ここが神々を祭る廟であることを注意すべきである。都市の中心區の十字大街に廟を置くのは、古代支那のみでなく、古代印度をはじめ多くの古代文化に認める所、文化史上甚だ興味ある問題だ。

(印畫の複製を禁ず)

亞細亞大觀(十一輯七回2)





大奉國寺伽藍

(錦州省義縣)

大奉國寺は遼の開泰初年即ち今から九百二十餘年前の創建といはれる。元末頃までは非常に宏大な伽藍であつたらしいが、その後大部分が廢滅して、今では最後方に大雄殿が一棟残つてゐるばかりで、大雄殿前の無量壽殿や山門は清代の粗末な建築に過ぎない。大雄殿は滿洲に比類ない大建築で、且つ木造最古の建築と言つてよい。

(印畫の複製を禁ず)

大佛莊嚴

(義縣奉國寺)

大雄殿内には大佛像が七體、佛壇上に並んでゐるので、奉國寺を俗に大佛寺と呼ぶ。この殿は元末までは七佛殿と言はれてゐた。佛像は後世金色を塗り加へたり、補修を所々に施したので、一見甚だ粗雑なものやうであるが、遼代の作がとくに今迄傳へられたいものらしい。背光の先端が天井の上まで及んでゐるのは、天井を後世附け加へた結果である。

(印畫の複製を禁ず)

(4回七十一大亞細亞)





金石の代金

(寺國奉縣義)

これだけ見事な彫刻のある石碑は他にないだらう。碑文に見ゆるやうに明昌三年、即ち七百四十餘年前の作であるが、此の碑文の作者は、明昌三年よりも五十年餘り以前に宋から金へ來てゐたのであるから、碑文の内容は約八百年許り前の事を示してゐる。

石碑の幅よりも彫刻の部分(螭首)の方が幅が廣い點が一特色である。

(印畫の複製を禁ず)

朝陽南門外

(錦州省朝陽)

朝陽のシンボルは平たい泥屋根の中に、一際高くそびえて立つ二つの塔だ。餘り大きな町ではなく、城壁も泥築の粗末さで、東西南北に各一門を開く。門上の廟が見張所に利用されてゐるので、些か物々しきを感じる。寫眞の城門に近いのは南塔で、その右に薄く見ゆるのが北塔だ。

(印畫の複製を禁ず)

亞細亞大觀(十一輯七回 6)





坊牌の陽朝

(陽朝省州錦)

朝陽城内の道は折れ曲つてはゐるが、とにかく城門を結ぶ十字街が最も見るべき大街である。その中の南北大街にこの牌坊が二棟立つてゐる。極く簡素な牌坊であるが、それによつて朝陽の街路が特色づけられてゐることは認めてよからう。交通頻繁な今になつては牌坊の幅に少し狭さを感じる。やがて滅ぶべきものであらう。

(印畫の複製を禁ず)

朝陽北塔

(錦州省)

朝陽の二塔の中、南塔には佛像などの彫刻が
欠失してゐるが、北塔には四面共に現存して
ゐるのは嬉しい。しかしこの彫刻には金代
頃になり手を加へたものか、遼代とは思へ
ない新さがあり、魅力を失つてゐる。
第二層以上の軒の出の取り扱ひは見事であ
り、南塔以上に古いことを示す。恐らく遼代
でも早い頃の作であらう。

(印畫の複製を禁ず)

8) 711-11 大觀亞細亞





寺 順 佑

(陽朝省州錦)

朝陽城内の中央部に宏大な地域を占めたラマ寺がある。それが佑順寺だ。すべて一階だけを使ふ建築だから、承德の寺のやうな立體的な美観は伴はないが、殿内には例のグロテスクな諸像があつて、相當な寺である。寫眞は讀經を行ふ殿、右に少し見ゆるのが大殿で、この二棟が寺の中心をなす大建築である。

(印畫の複製を禁ず)

佑順寺の塔

(陽朝省州錦)

佑順寺の讀經殿の前方東西に、それぞれ一基のラマ塔が置かれてゐる。下方の基壇が幅三米だから、以て小さなものであることが知られよう。彫刻も粗雑で、唐草模様は朱色で描いただけに止る。寺は康熙四十六年に出来上つたものといふから、この塔も康熙乾隆頃の作であらう。

(印畫の複製を禁ず)

亞細亞大觀(十一輯七回10)

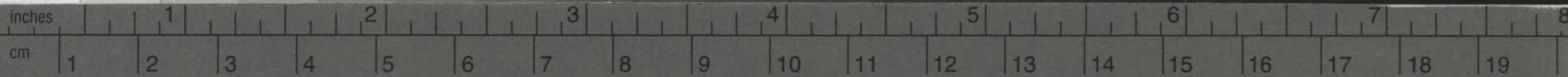


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

